

【11】

氏 名（本籍）	なば た め と も み 生天目 知 美（茨 城 県）		
学 位 の 種 類	博 士（言 語 学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4825 号		
学位授与年月日	平成 20 年 7 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	日本語の会話における「ね」の研究 —情報管理と会話管理から見た文中の「ね」と文末の「ね」—		
主 査	筑波大学教授	博士（言語学）	砂 川 有里子
副 査	筑波大学教授	D. L.（言語学）	青 木 三 郎
副 査	筑波大学教授	Ph. D.（言語学）	竹 沢 幸 一
副 査	筑波大学講師	博士（学術）	澤 田 浩 子
副 査	筑波大学講師	Ph. D.（言語学）	高 木 智 世

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語文法で一般に終助詞と呼ばれる「ね」が文末に現れる場合と文中に現れる場合に着目し、情報管理的側面と会話管理的側面のそれぞれの観点から「ね」の出現位置と「ね」の機能との関連を明らかにすることを目的とする。本論文の構成は以下の通りである。

序 章 本研究の目的

第一章 文末の「ね」と文中の「ね」

第二章 文末の「ね」と情報管理

第三章 文中の「ね」と情報管理

第四章 文中の「ね」と会話管理－「さ」との比較を通して－

第五章 文末の「ね」と会話管理－「～んですね」に着目して－

終 章 本研究のまとめと今後の課題

序章では、本論文の目的を述べるとともに、情報管理的側面（発話内容に対する話し手の態度を表す機能に着目する側面）と、会話管理的側面（話し手と聞き手との相互作用に関わる機能に着目する側面）とについて詳述し、分析手法に関する本論文の基本的立場を明らかにする。

第一章では「ね」に関する先行研究を、文末と文中という出現位置と「ね」の機能との対応関係から概観し、従来の研究が、文末の「ね」に関しては情報管理的側面、文中の「ね」に関しては会話管理的側面からの考察が中心であったことを述べる。さらに、そのような分析では不十分であることを指摘し、文中・文末にかかわらず、情報管理と会話管理の二つの観点からの分析が「ね」の研究に必要であると主張する。さらに、文末と文中という出現位置についての本論文の捉え方を明らかにする。

第二章では、文末の「ね」の情報管理的側面について論じる。文末の「ね」の情報管理的側面に関しては従来から数多くの研究があるが、それぞれに問題があることを指摘し、定延（2002）の「探索」という概念を援用して文末の「ね」の情報管理的側面の記述を試み、「ね」の情報管理的側面を「当該の発話で表され

ている命題が探索の結果認識されたことを表す」と記述する。また、対人的ムード（野田 1997）に付加する「のだ+ね」について論じ、この形式が文末の「ね」の中で形態的・意味的に特殊な形式であることを述べる。

第三章では、文中の「ね」の情報管理的側面について論じる。文中の「ね」に発話内容との関わりを認めようとする研究はこれまで見られなかった。文中の「ね」は「文」が完成される以前の要素に伴う形式であるため、文末の「ね」とは違って情報管理的な機能はないと考えられていたわけである。しかし、本論文では既に産出された発話内容だけではなく、これから話そうと計画している情報も考察の対象とすることで、文中の「ね」にも文末の「ね」と共通する情報管理的な機能が存在することを指摘する。本章での主張のポイントは以下の2点である。①文中の「ね」は、「話し手が探索領域を探索し、探索結果が得られることを見込んでいることを示す」という話し手の態度を表す。②話し手が後続発話で主張したい評価や態度が予測できる条件があれば、文中の「ね」であっても文末の「ね」と同様の同意要求用法を持つことが可能である。本章では、以上のほかに、両者の持つ同意要求用法が全く同一のものではなく、文中のほうがイントネーションや語用論的環境において聞き手の同意を得られることがより強く保障されなければならないという点が指摘される。

第四章では、文中の「ね」が会話管理に果たす役割を考察する。文中の「ね」は、聞き手の相づちを誘発したり、話し手が発話権を維持したりするための装置として捉えられることが多いが、これらの機能は文中に出現する「さ」と類似するものである。本章では「さ」と比較した場合に「ね」の直後に聞き手の相づちが打たれることが非常に少ないという現象と、文中の「ね」が質問文や同意要求文にほとんど出現せず、聞き手へ情報を提供する発話に出現するという現象を指摘し、文中の「ね」と「さ」は共に発話を区切り、「反応機会場（西阪 2006）」を作る「区切り子」であるという点では共通するが、以下の違いがあることを主張する。①「さ」は後続の相互行為に関して聞き手の注意を喚起する役割をしている。②「ね」は話し手が自分の後続発話に聞き手の注意を引きつける役割をする。

第五章では、文末の「ね」が会話管理に果たす役割を考察する。これまでの研究では、主に発話権管理の側面から、聞き手に発話権を渡すための適切箇所（Transition Relevant Places）が文末の「ね」によって標示されることがあるとされてきた。本章では文末に用いられながらも文末の「ね」とは異なる用法を持つ「のだ+ね」という形式に着目し、この形式が文末の「ね」とは違って発話権を渡さない傾向があること、また、単に発話権を渡さないだけではなく、発話量や話題の展開の上からも話し手主導の発話管理を行う機能を持ち、文中の「ね」に共通する特徴をもつものであることを記述する。さらに、「のだ+ね」と「のだ+よ」の比較を上下関係のある話者同士の会話を用いて分析し、「のだ+ね」には後続発話の存在をほのめかす機能があるのに対して「のだ+よ」には当該の発話を際立たせる機能があることを示し、談話展開の構造についても両形式が異なる機能を果たしていることを述べる。その上で、文中の「ね」と文末の「のだ+ね」の類似点が第二章で議論した「探索」という概念によって説明できることを述べる。

終章では、本論文の議論で得られた知見をまとめ、今後の課題と展望について述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

「ね」という形式は、文頭、文中、文末のいずれにも現れる。そのうち文中と文末に現れる形式は終助詞として同じ品詞に分類されることが多い。終助詞「ね」の研究は、従来、文末の「ね」に着目されることが多く、文中の「ね」に関する論考は比較的限られている。また、分析の観点においても、文末の「ね」は情報管理的な側面から、文中の「ね」は会話管理的な側面からといったように、それぞれ別個の観点から記述されることがほとんどであった。それに対し、本論文は、文中であるか文末であるかの別に関わらず、「ね」を情報管理と会話管理の両側面から記述する必要があることを主張し、文中の「ね」と文末の「ね」が相互

に異なる機能を担いながらも、多くの共通する特徴を持つものであることを明らかにしている。

本論文は、文法的に許容できない事例を含めた多数の用例を丹念に分析し、文中の「ね」と「ですね」、文末の「ね」と「さ」、文末の「のだね」と「のだよ」など、類似の用法を持つ形式相互の比較を行い、その差異を手がかりとして「ね」の現れる位置と「ね」が担う機能との関係の記述を試みている。的確な用例を一定の手順で分析し、精緻な論をひとつひとつ積み上げ、説得力のある主張を組み立てていく本論文の論理構成は優れたものと言える。中でも特に会話管理の側面からの分析には、話し手と聞き手との相互行為の記述において、上下関係のある会話の分析、聞き手の応答表現の分析、相づちの数量的な調査研究など、独創的な観点からの鋭い切り込みが行われており、著者の優れた資質を感じさせる質の高い議論が展開されている。また、会話管理と情報管理との関わりについて示唆に富んだ考察を展開しているほか、後続談話への展開の仕方に着目した談話展開機能についても緻密な分析が行われている。

一方、情報管理的側面の議論においては、対人的ムードを表す場合は「のだ」に「ね」を付けにくいのに対し、「のです」には「ね」が付けられるなどの興味深い現象を数多く扱っているものの、「探索」という説明概念の妥当性が十分に検証されないまま議論が展開されている箇所が見られる。「探索」という概念だけで「ね」の情報管理的側面のすべてが記述できるかどうか、さらに慎重に検討する必要がある。また、イントネーションの記述についてはさらに詳細な分析が必要とされる。

以上に述べた問題があるものの、本論文の独創的、かつ緻密な議論の価値はいささかも揺らぐものではない。本論文は、「ね」だけではなく「さ」や「よ」なども含む終助詞の記述に情報管理的側面と会話管理的側面からの光を当てることの必要性を示した先駆的な論文として、今後の終助詞研究に関して新たな可能性を開くものである。また、文頭の「ね」を含む「ね」全般の意味と機能の分析においても有用な知見を提供するもので、今後の研究のさらなる展開を期待させる優れた論考である。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。